Winter Waver

小笹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｉｎｔｅｒ　Ｗａｖｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ３５０９Ｙ

【作者名】
小笹

【あらすじ】
前世の記憶を持って生まれてきた２人の兄弟の物語。永瀬家の兄弟、黄楊（きよう）と広葉（ひろは）は生まれながらにして、前世の記憶を持っている。２人は前世では生まれた時代も、環境も違うがただ一つだけ、共通点があった。それは前世で愛し合った女性と結ばれなかったこと……。

記憶

ひんやりとした空気が部屋に伝わっている。

毛布と掛け布団を全身にすっぽりと被り、静かな寝息を立てているのはこの部屋の主、永瀬黄楊だ。

彼はもうじき大学を卒業し、大学院へと進む。

今年の九月に、社会学部の学位記を授与されたことをきっかけにこの進路を選んだ。

特に就職を考えているわけではないし、黄楊自身もまだ遊び足りないと思っているからだ。

黄楊には二つ年下の弟がいる。黄楊とは違い、真面目で努力家。

考え方も違い、自由奔放に生きている黄楊とは、それが原因で些細な喧嘩をすることもしばしばある。

もっとも、勝手に怒るのはいつも弟の方で、黄楊はというと”はいはい”の一言でそれを終わらせる。

この寒さのためか、黄楊は眠りから目覚めた。

なぜか頭が重く感じる。夢を見ていた所為もあるのだろう。

夢ははっきりとは憶えていないが、その中ではまた自分が弟の広葉に怒られていたような気がする。

よくできた弟だとは思うけれど、何も夢の中にまで出てきて怒らなくても、と黄楊の胸中に愚痴が漏れた。

ベッドの横に置いてあるミニデスクの上の時計を覗くと、まだ朝の八時だった。

今日の大学の講義は一時からなので、まだ時間はある。

もう一度寝ようかとも考えたが、また変な夢を見てしまっては、より一層寝覚めが悪くなるだろうとも思い、起床することにした。

起き上がった瞬間、一気に暖かかったものが身体から離れ、黄楊は寒さに身震いする。

（寒っ…もう冬だな…）

月は十一月の下旬。冬はもうすぐそこまで来ていると実感させられる寒さだった。

永瀬家は一軒家ではなく、六階建てマンションの最上階だ。

そのため夏は特に蒸し暑いが、冬はどちらかというと暖かいほうである。

だが、今冬はかなり冷え込むらしく、まだ十二月にもならないというのに寒い。

黄楊がリビングへ向かうと、弟の広葉が炬燵の準備をしていた。

毎年、永瀬家は我慢し、十二月に登場していたはずの炬燵が、もうすでに出ている。

「あれ？炬燵出したんだ」

作業中に突然後ろから兄の声がして、広葉は驚いて振り返った。

「兄さん。もう起きたんだ…そうだよ。父さんが今年は特別寒いから、我慢しなくていいって」

永瀬家は両親共働きだが、特別裕福な家庭ではないため、それなりの節約をしている。

しかしそれも、この寒さではどうにもならないらしかった。

「兄さん。今日の講義は昼からだったよね？その割には早く起きたんじゃない？」

いつもは昼からの講義であれば、十時過ぎに起きてくるはずの兄に、弟は珍しいものを見るような目で言った。

永瀬広葉は、永瀬家の次男で黄楊の弟である。

この時代では珍しく、芸能人顔でルックスは良い方だが、真面目で健全な大学二年生だ。

ちなみに恋人も一度も作ったことはない。告白されても広葉はそれを徹底的に断るのだ。

「嫌な夢を見たからな。また眠れそうになかったから、そのまま起きた」

真面目な広葉とは対照的な黄楊は、そのルックスの良さと社交性で恋愛経験は豊富だった。

現在も同じ学部の同級生に恋人がいる。

そんな兄弟だから、気が合わないのかもしれない。

二人にとって、”恋愛”という価値観は常に百八十度違っている。恋愛だけではないけれど。

「その夢って、もしかして…」

黄楊の言葉に、広葉は目を大きく開いて何かを問おうとした。

その広葉の問いかけに黄楊は”何か”を察し、即座に返答する。

「お前が思っているような夢じゃないから。ていうか、お前が夢の中に出てきて俺を怒鳴ってただけ」

黄楊は広葉の目から自分のそれを逸らし、静かにそういうとキッチ

ンへ迎い冷蔵庫を開ける。

それ以降、二人は無言だった。

同じ空間にいるのに、別の空間で、それぞれ違うことを行っているように。

広葉が黄楊の”夢”を、一体どのようなものと勘違いしたのかは、当人たちが一番よく理解していた。

しかし”その”話になると、いつも二人は喧嘩をしてしまう。

それは、二人の”恋愛”への価値観の違いであった。

冷え込みの激しい中、今日も黄楊は大学へ向かう。

本当ならまだ眠気はあるし、サボりたいところだが、今日の講義は割と好きな教師のものであるため、出席したいという気持ちの方が強かった。

こういった日は、黄楊自身の機嫌は良い方だが、今朝の弟との陰鬱な空気がまだ身体に染みており、なかなか気分は上昇しない。

（まあいいか…アイツも今日は講義受けるって言ってたし…）

黄楊が思った”アイツ”とは、彼の恋人のことである。

付き合い始めてまだ間もないが、彼好みのルックスでなかなか可愛らしい。

一か月前に告白され、そろそろ彼女が欲しいと思っていた黄楊にとっては願ってもない申し込みだった。

以前彼が付き合っていた女性は、黄楊から振ったのだ。

束縛が激しく、そのくせ本人が他の男と話しているのをこちらが咎めても逆ギレするという性質の悪い女だった。

それに比べて今の恋人は、束縛も特別激しいわけではなく、これといってすぐに嫉妬するようなこともない。

自由な気質の黄楊にとっては、結構付き合いやすい女性である。

（気晴らしにデートにでも誘ってみるか…）

静かに揺れ動く電車の中、黄楊はぼんやりとそんなことを思っていた。

広葉は都市伝説や神話などを調べ、それを自分なりに解釈するという一風変わった趣味を持っている。

そういった類の話に興味を抱く人はごく少数だと分かっていたから、大学に入って彼の趣味にあった傾向のサークルがあると知った時は驚いた。

『民間説話研究会』。この研究会の活動内容は、その名の通り昔話や世間話などの研究だが、広葉の趣味である都市伝説や神話などの研究も行っていた。

名目的には研究会ではあるが、実はただ会話をして終わるという日も少なくない。

真面目な広葉にしてみれば、そんな一面も新鮮で、今では同じ研究会の仲間と会うことは楽しみの一つでもあった。

特に今日は仲間に会いたい気分である。理由は簡単。

今朝の兄とのあの重い空気を忘れたいからだ。

（兄さんのバカ…）

大学の講義中も、ノートと教師を交差に見る半面、今朝の兄の態度がちらつき若干の苛立ちを覚えてしまっていた。

結局この日の講義は、あまり集中できないままに終わった。

広葉の入っている研究会の部室は、部室棟二階の五つ並んでいる部屋の内、階段から上がり一番奥の部屋である。

現在の部員は基本的に六人。幽霊部員を入れても八人くらいにしかならない少ない人数での活動だ。

特に人見知りをするわけではないけれど、この少ない人数での活動が、広葉の落ち着くポイントともなっている。

「よっ！ヒロちゃん。今日は面白いネタを見つけてきたぞぉ～」

部室のドアを開くと、そこには見慣れた先輩の姿と部員四人の姿があった。

それと、あともう二人は広葉の知らない女性二人がいる。

一人は短髪の女性で、もう一人は長髪の女性である。

「こんばんは、先輩。新しい部員さんですか？」

二人とも見た目からして清楚で控えめな女性だ。

広葉の先輩が言っている”面白いネタ”を見つけてきたのも、恐らくこの女性たちだろう。

「そうそう。まだ保留だが、一年生の美女お二人だ。お前の初後輩だぞ」

この研究会は、今年の四月から新入部員を募集していたが、今までは誰ひとり喰いついては来なかった部だ。

それを考えると、一年生の部員は歓迎するところ。しかし、まだ保

留。

「はじめまして、星崎小夜といいます」

先に短髪の女性が広葉にお辞儀し、自己紹介をした。先輩が言うとおり、結構な美人である。

そしてそれにつられるようにして、長髪の女性も自己紹介をする。

「秋元すみれです」

成るほどこちらも先輩の言ったように美人である。だが、相変わらずと言っていいほど、広葉はそんな美人にも興味を示さなかった。

「永瀬広葉です。もし部内の空気が気にいったら、入部していただけると嬉しいですね」

そう広葉が言うと、すみれと小夜は顔を見合わせ再度広葉に視線を向け微笑んだ。

「私たち、今日はこの部の方たちに提供したいお話があって来たんです」

そう小夜が言うと、広葉は先ほど先輩が言っていた”面白いネタ”のことを思い出した。

先輩の方へ広葉が視線を向けると、得意顔をした仲間たちが室内の中心にあるテーブルを囲っており、こっちへ来いと手招きしている。

「どんな話ですか？」

広葉が手招きに乗ると、彼もテーブル椅子に座り、その話に興味を持った。

「私が昔に聞いたお話です。…神話、のようなものですね」

そう言ったのはまたしても小夜だった。

「そうだ！星崎さん、お話の続きを…」

先輩が急かすように言うと、小夜は苦笑し、話し始めた。

しかし、その話をしている時、彼女の友人であるすみれは何故か一歩引いた所にいる。

「…？どうしたの？君もこっちで話を聞こう。もう君は知っているかもしれないけど」

広葉はそんなすみれのことを心配し、声を掛ける。

すると彼女は、嬉しそうに笑って彼の隣にやってきた。

「今日のそのネタ、面白かったよ。リーテ神話ねぇ…初めて聞いたな」

小夜が語ったのは、パラレルワールドを題材に用いられた空想の神話物語だった。

「もう一つの地球ですか～…興味深いですね～」

「その話、何処で聞いたの？」

小夜に質問の嵐が巻き起こる中、ほとんど話を聞いていただけのすみれは部室のドアのすぐそばに控えていた。

もう時刻は午後六時。冬ということもあって、辺りは既に暗かった。

もしかしたら、暗くなっていることで帰りが少し不安になっているのかもしれない。

「秋元さん」

広葉は、少し不安そうな表情を浮かべていたすみれに話し掛けた。

彼女はまたしても思わぬタイミングで話し掛けられ、今度は少し驚いた色を見せる。

「是非、また来てくださいね。…もしかしたら、今日は付き添いで？」

何となくだが、すみれは小夜の付き添いで来たように感じられた。

「はい…あまりこう言った話はしなくて…あっ！退屈って意味ではないんですけど…」

やはりそうだったか。でもこれを機に、こういった世界に触れるのもいいかもしれない。

なかなか踏み込めない特殊な領域ではあるけれど…。

「人によって、考え方は色々ですから強制はしませんけど…個人的な意見を言えば、とても楽しいですよ？」

素直に自分の意見を述べると、すみれは少し考えた顔をした。

しばらくして、彼女は答える。

「それじゃあ、入ってみようかな…」

それは独り言のようだったが、それでも確かに入部の意を表したものだった。

午後十一時過ぎ。兄弟は今朝ぶりに顔を合わせると、何気ない顔で話し掛けてきたのは兄の方だった。

「ただいま。父さんは？」

永瀬兄弟の父親は朝から夕方まで働いている。

母親は夕方から深夜までの仕事なので、帰っていないことは知っていた。

「もう寝たよ。夕ご飯、コンビニで買って来てあるから、温めて食べて」

リビングのテーブル椅子に座っていた広葉はそういうと、キッチンの方を指さした。見るとそこにはコンビニ弁当がある。

しかし黄楊はその弁当に手を付けようとはせず、テレビ前のソファーに腰掛けた。

「ああ、もう外で食べてきたから…」

すると、テーブルで本を読んでいた広葉は、そっとそれを閉じて兄に問った。

「誰と？」

リモコンでテレビを付けた黄楊は、画面に集中するようにその問いに無視を決め込んだが、やがておもむろに口を開いた。

「――彼女と」

そういった途端、二人の空間はまた別の世界になったような感じがした。

そしてまた、今朝の静寂が訪れる。しかし、今度のそれは長くは続かなかった。

広葉が静かに啖呵を切ったのだ。

「相変わらずだね…兄さん。兄さんは、”彼女”に会いたいとは思わないの…？」

広葉の言葉をまともに聞いて、それに答えると疲れるのは目に見えている。

それなのに、毎回のように問われるその問いに、答えてしまうのはなぜだろう。

「くだらないな。俺は俺だけの恋愛を楽しんでいるだけ。広葉だって、顔はいいんだし？そろそろ彼女作ったら？」

二人の”恋愛”の価値観の違い。さっき広葉が言った”彼女”の正体、それは。

広葉は椅子から思いっきり立ち上がり、勢いよく兄に言い放った。

「兄さんは会いたくないのかよ！僕たちは、前世で結ばれなかった女性を、この世で見つけなきゃいけない…！それなのに兄さんは今まで、

“その女性”に対して、何も誠意を示していないじゃないか！恋人ができたと思ったら、すぐに別れてまたその繰り返し。どうしてそんないい加減な恋愛しかできないんだよ！」

この二人。実はとんでもないものを抱えて生まれてきたのだ。

物心ついた時には、もうその記憶の一部始終を思いだし、さらに中

学に上がる頃になると、一部だけではない。
全てを思い出したのだ。――前世の記憶というものを。
かといって、この二人が前世で兄弟同士だったのかと言われればそうではない。
兄弟の前世は、互いに愛しい人と死に別れ、また生き別れとなって生涯を閉じることとなってしまった。
そのため広葉は、生まれ変わったこの世界で再び前世の恋人と巡り合うことに使命を感じていた。
「きっと、彼女も生まれ変わっているはずだ！だから僕は、必ず彼女を見つけ出すっ…！」
だから広葉は、今まで幾人の女性に告白を受けたが交際を断り続けた。
それはまだ見ぬ”恋人”への誠意。しかし、そんな自分とは対照的に黄楊は真逆の行動を取っている。
愛しい人と結ばれることの叶わなかった切なさと、苦しさを、黄楊も知っているはずなのに。
だが、何度弟に同じことを言われようと、黄楊はそれに一切耳を貸さなかった。
正直、心底バカバカしいと思っているからである。

いつも問答無用で問われる弟の疑問に、黄楊が答えるのは彼にもちゃんと現世で恋をしてもらいたいからだ。

前世の記憶なんて、そんなくだらないものに縛られている限り、まともな恋愛が出来る筈がない。

それを理解してほしいという願いは、いつも届かないけれど。

「そんなものに縛られているお前が可哀そうだよ」

「…っ！」

だからいつも、こんな言い方しかできない。

それでも届かない。中学の頃から、広葉の想いは変わらなかった。

二人でいる時、必ず前世の恋人の話をしていたのだから。

だからそんな彼に、兄として心配になったのだ。

このままでは、広葉は前世の記憶に喰われてしまうのではないかと。

だからもっと、自分の恋愛を見て、見習ってほしいと思っていたのに。

広葉…、目を覚ませ。前世の恋なんて、この現世では要らないものなんだ。

お前は、お前なりの恋愛をして、早くその過去を拭い去ってくれ。

黄楊のそんな願望にも似た祈りは、広葉に未だに届かない。

結局は、自分で変わるしかないのだろう。

ならば、早く変わって欲しい。その日を、切に願う。

記憶（後書き）

Ｓｕｍｍｅｒ　Ｓｋｙはコミカルでしたが今回はシリアスです。

恋人

今年はかなり冷え込むらしい。それは都会も同じこと。

十一月下旬で秋が過ぎて間もないというのに、真冬のような冷え込みを感じる今年の寒さ。

これは、前世の記憶を持って生まれてきた二人の兄弟の寒空の下での、物語。

兄はこういう。くだらない過去の恋を、現世にまで持ち込むつもりはないと。

どうして？兄はそんな風に思うのだろう。自分には分からない。兄の気持ちが。

日曜日の民間説話研究会の部室。広葉は昨日の兄との言い合いを思い出していた。

テーブルで神話や都市伝説について語り合う仲間たちがいるなか、兄の声が木霊する。

――そんなものに縛られているお前が可哀そうだよ――

そんなもの。それは広葉の前世の恋のことである。

必ずこの現世で、見つけると誓った女性のことを、そんなもの呼ばわりするなんて。

兄にも前世で恋をした相手がいるはずなのに。

愛しい人を失った気持ちも、兄には分かるはずなのに。どうして、考え方が違うのだろう。

答えは簡単だ。兄も広葉も、兄は兄で、広葉は広葉だからだ。人それぞれ考え方なんて違う。

頭では分かっているのだが…。

「……――ぱい？…永瀬先輩？」

「ああ、気にしなくていいよ、秋元さん。そいつ、たまにこうなることがあるんだ」

先ほどから様子が変わったように見える広葉に、すみれは心配したが周囲の部員は彼が時々、物思いに耽ることがあることを知っていたので、そう彼女に説明した。

兄と言い争った次の日は、ほとんどの確率でこうなる。

部員たちは、ただ単に彼が瞑想でもしているのだろうと思っている

のだが。

当然のことながら、広葉は前世の記憶があることを周囲の人間に話していない。

そんなことを話しても、誰も信じてはくれないだろうと思っているからだ。

ただ、兄にだけはそれを包み隠さず言っている。兄は、広葉と同じだから。

前世に対しての考え方は違うけれど。

周りの部員に広葉のことを説明されても、すみれは彼を心配そうに見つめていた。

けれど、広葉はその視線に気付かなかった。

待ち合わせ場所にはうってつけの駅前。

黄楊は弟のことを思い悶々とした気分のまま、デートの待ち合わせ場所に顔を出した。

「遅いよ、キヨ君。大分待っちゃった…」

気分があまりよろしくない時に聞けば、少々煩わしいと思えてしまう黄楊の現在の彼女を前にし、彼は不機嫌さを隠すように笑った。

「ごめん、ごめん。家を出た後に忘れものに気付いてさ、取りに戻ってたんだ」

本当はただ、昨日の広葉の相変わらずの言いように呆れ、眠れず朝起きられなかったのだ。

考え方は人それぞれ。

そう分かってはいるが、いつまでも現世に前世の話を持ち込んでいる広葉が心配で、叩く憎まれ口の裏にそんな彼を気遣う言葉をチラつかせるが、一向にそれも伝わらない。

「ちょっと！聞いてるの？キヨ君…」

自分が考えに耽っている間に、目の前で色々と語っていたらしい恋人が、一際大きい声を出した。

その声にふと我に返る。

「ごめん！何？」

同じ学部の現在の黄楊の恋人であるミホは、細い目でじっと彼氏を睨みつけていた。

待ち合わせ時間に三十分近く遅れてきたあげく、自分の話を聞いていなかった黄楊に怒っているのだろう。

ミホの視線が今の黄楊には痛く、また掛ける言葉も見つからない。
だが、彼には一つだけ手段があった。
「わかったよ…。お詫びにほら、この前できたケーキ屋さん。あそこに連れてってやるからさ」
「ホント！？」
甘いものに弱いミホは、ぱあっと明るい表情となり、瞳を輝かせた。
ついさっきまでのあの威圧感ある細い目は、どこかに吹き飛んでいる。
（たまにはこんな恋人も悪くないか…）
今まで黄楊が付き合ってきた相手は、割と知的な”お嬢様タイプ”の女性ばかりだった。
思えば、自分にはかなり贅沢な恋人たちだったと思う。
それに比べて、ミホはどこにでもいるような平凡な女子大生。
普通の女性との付き合いは黄楊にとって貴重な経験だ。ミホとは何回かデートをしている。
しかしそれは、今までのような大人くさいものではなく、カラオケだったり、今みたいに喫茶店でのデートだったりする。
それまで、黄楊が経験したデートというのは、美術館にいったり、

高級ホテルでのディナーを楽しんだりと、自分でもませた恋をしていたと思うような場所ばかりである。

思えばその女性たちは、どことなく前世の恋人と似ていたのかもしれない。

自分も気付かないうちに、実は前世の恋人を求めていたということなのだろうか？

だがそれが今回、ミホと付き合うことにより、また少しそれが遠くなった気がする。

こうしていつか、記憶さえもなくなってしまえばいいのに。

人間は、新たな人生を育むために、生まれ変わるのだから。

（広葉にも…いつかそれが分かるだろうか…）

分かってほしい。いや、分かってもらわなければ困る。

ミホの声がまた遠く彼方へ消え去ろうとしていた。また広葉のことを思い浮かべる。

前世の恋を追い求める、彼の一途な姿が。

それを掻き消そうと、軽く黄楊は頭を振り、ミホが興味を示していたケーキ屋の扉を開けた。

研究会の活動が、今日は雑談だけで終わろうとしている。

放心状態で兄のことを考えていた広葉も、途中で我に返り、雑談の中に加わっていた。

ずっと隣で自分を心配していたらしいすみれに慌てて謝罪し、今日は彼女と二人で会話することが多かった。

会話の内容は、研究会のことやそれから逸れたすみれの趣味の話や大学で起きたことなど。

色々と会話をしていくうちに、自然と笑顔が絶えなく続き、いつの間にか兄のことすら忘れていた。

「今日は楽しかったです。永瀬先輩が話し相手になってくれたお蔭ですね」

すみれもどうやら楽しんでくれたらしかった。

もしかしたら放心状態だった自分を気遣って、話を合わせてくれていただけなのではないかと少し不安だったが、どうではなかったのだ。

「こちらこそ。楽しかったよ、秋元さん」

広葉は満面の笑みで、すみれにそう返事した。

ケーキ屋でリラックスした後、黄楊とミホは大手デパートでウィンドウショッピングをしていた。

デパートは十六階建てで、ほとんどがブティックや女の子向けのデザート中心のチェーン店である。

正直、体力は使うし、女は買いもしないのに色々と見たがるし、黄楊はあまり楽しめない。

ミホは運動派なのか、広いデパートのなかを走るように見て回っていた。

走ったかと思えば、ぴたりと止まり、気に入った商品を見つめる。

時には黄楊に”買って欲しい”と遠回しにおねだりをしてきた。

だが、直接言われていないことをいいことに、黄楊はその強請りを遠回しに断る。

貢がされるのは主義じゃない。そうこうしている内に、午後の七時を回ろうとしていた。

二人はアクセサリー店を覗いていたが、黄楊が時間に気付き、ミホ

を夕食に誘う。

「そっか…もうそんな時間か。じゃあ、どこで食べる？」

黄楊は、ミホがウィンドウショッピングを切り上げ、素直に夕食に同行してくれるかどうか不安だった。

けれど、その不安が取れ、ホッと一息吐く。

「そうだな…ミホは何が食べたい？」

実を言うと腹が減っているだけで、今は実際、食べられるなら何でもいいと思っていた。

どうせ自分の意見は適当にスルーされるのだから。

「じゃあ、このデパートにあるファミレスがいい！」

“はいはい”と、恋人の御所望通りの場所へ行き、今日のデートはその場で終わった。

広葉は六時過ぎには自宅へ帰ったが、黄楊は九時過ぎになってから帰ってきた。

また黄楊が言う新しい恋人と一緒に居たのかと思うと、広葉は不機嫌になる。

一度、前世のことを言いあえば、三日間前後は気まずい空気となる。そしてもとに戻ったかと思えば、一か月も経てば再び言いあいになる。

基本的にはその繰り返しだ。

前世のことは兄弟以外には話していないので、両親にとっても時々訪れる”痛い空気”の意味は謎のままだ。

だがその内、きっとまたいつものやつだろう、と両親もその空気を気にしなくなっていった。

今日は黄楊が帰宅しても、昨日のような言いあいにはならなかった。いや、予め二人が互いを避けていたと言ったほうがいいのかもしれない。

きっと明日になれば、黄楊か広葉のどちらかが、どちらかに何気なく話し掛け、喧嘩する前の二人に戻るだろう。

頑固だけど、兄の前世の恋を大切に思うからこそ、広葉はきつく言うのだ。

兄には、気持ちは伝わらないけれど。

午前一時。今日はなかなか楽しい時間を過ごせた。

長い時間、後輩の秋元には心配を掛けてしまったようだが、その後の会話は穏やかなもので。

今日は良き夢が見られそうだ。そんな予感がする。

自室のベッドで、目を閉じ今日のことを思いだす。明日、自分から兄に声を掛けよう。

喧嘩が終わる時、いつも話し掛けてくるのは黄楊からの方が多い。

だから、たまには自分から声を掛けよう。

しばらくし、広葉は眠りについた。そこで、彼は夢を見た。

それは遠い昔の、過去の映像である。

昭和十三年。日中戦争が繰り広げられた時代。

二十二歳の若さで、戦場に向かった一人の男がいた。

その男には、二つ下の婚約者がいた。もうすぐ結婚、だったはずの二人に訪れた突然の別れ。

永瀬広葉の、前世の記憶である。

約束

遠い昔の夢。それは広葉自身のものではなく、前世の魂の記憶だった。

昭和十三年、七月。二十二歳の男のもとに、赤紙と呼ばれる召集令状が届いた。

徴兵制度が働いたこの時代。

たとえ軍に志願していない男子であっても、戦場に出されるのは珍しくなかった。

それは家族のため、故郷を守るため、そしてお国のため。

召集令状が届くということは、むしろ男子にとっては最高の名誉である。

お国のために、立派に命を散らすために。

木の匂いがする比島の家。居間に集まった家族の面持ちは、ただ一人を除いては暗いものだった。

「兄ちゃん、どうしても行かないといけないの？戦争に行ったら、もう兄ちゃんと会えなくなるよ…」

今日、赤紙が届いた比島大助が出征するのは明後日になる。

弱気な声で大助に擦り寄ってきたのは、まだ小学三年生の妹の智子だ。

しかし、唯一明るい表情を見せた当の大助は、これまた笑顔で智子の頭を撫でる。

「何を言ってるんだ。智子、兄ちゃんはな、お国のために立派に奉公してくるんだぞ」

まだ幼い妹に、そして家族に、自分はあたかも名誉なことと明るく振る舞う。

それが最後の親孝行であり、大助の誇りだからだ。

ただ、気になって仕方ないこともある。それは彼の、将来を誓った女性のことだ。

「…千佳子さんには、何て説明するんだ…？」

大助には、結婚を間近に控えた大野千佳子という婚約者がいた。

可憐で人一倍気が強く、はきはきとした爽やかな女性。

「きっと、彼女もいつかこうなる日が来るのだと、覚悟はしていることと思います。明日、赤紙が届いたと、そう言えば、済むことで

す」

ああ、何を言っているのだろう。結婚を申し込んだ男が、その約束を破って死にに行くんだ。

彼女は、こんな俺を何て言うだろう…。いつもの強かな態度で、”行ってらっしゃい”と言うだろうか。

それとも、”約束を破った！”と俺を責めるだろうか。

いずれにしても、これは国からの命令。避けて通ることはできない道だ。

誇るように笑みを湛えながら、大助は家族に就寝までそれを絶やさなかった。

明日、千佳子に会う時もこんなふうに笑っていられるかどうかは、分からないけれど。

二人のお気に入りの場所で、午後一時に待ち合わせ。

そう約束を交わしてから五日後のその日。

赤紙を持って、大助は千佳子と待ち合わせをしている場所へ向かっ

た。

二人が気に入っている場所。それは田んぼが目の前に耕されている並木道だった。

そのなかでも二人が気に入っている大きな木がある。そこが約束の場所だ。

（今日で、この道を歩くのも終わりか…）

彼女の顔は今、最も見たいものであり、それと同時に最も見たくないものである。

だが、約束の時間は刻一刻と迫ってきて。

実は大助は、約束の時間よりも一時間も早く木の下で待っていた。理由は単純だ。

彼女を待つ、この楽しい時間は今日で終わり。最後の日くらい、自分が先に待ち合わせ場所にいて、待っていたい。

そして、少しでも出征の話をする覚悟の時間を自分に与えるためでもあった。

大助は一度、二十歳で迎えた徴兵検査で不合格となっている。

その時、大助は腹膜炎になったり、風邪をこじらせたりと色々と身体的に不具合があったためである。

その頃は、千佳子と付き合い始めた頃だった。

思えばあの時、健康体であったら、徴兵検査に合格していたかもしれない。

あの時であればまだ、別れるのは今よりも辛くなかったはずだ。

「大助さん！」

千佳子がやってきた。五日ぶりに会うのが、相当楽しみだったのだろう。

彼女は喜色満面の笑みを浮かべ、大助の名を呼んだ。

そんな無邪気で、清々しい君の笑顔を見られるのも、もう終わりだ――。

「…どう、して…？」

晴れやかな空の下。千佳子が婚約者から聞いた言葉は残酷なものだった。

そして、言葉と共に彼女の視界に入ったのは、薄い赤い紙…召集令状である。

頭の中がぐちゃぐちゃになって、何が何だか分からなくなる。
召集令状の紙面に書かれている名前は、「比島大助」。婚約者の名であった。
茫然と立ち尽くす千佳子に対し、大助は無表情で彼女を見守る。
昨日、家族に見せられていたはずの笑顔が、彼女の前で出ないのはなぜだろう。
「徴兵検査では…不合格だった、はずなのに…」
しかし最近になって、赤紙の発行数は多くなってきたことは、噂になっていた。
まさか自分にそれが来るなんて思ってもみなかったけれど。
「お国は、俺を必要としている…だから――」
「生きて帰ってきて！」
大助が言葉を紡ぐ前に、千佳子がそれを遮り、大きな声で叫ぶように言った。
俯いていた顔をバッと上げて、目には涙を溜め込んでいたが、それでも曇らぬ声で続ける。
「あなたはっ…必ず帰って来てくれるでしょう！？…生きて帰って来ると、私と約束して下さい」

真っ直ぐな瞳が、大助の瞳を射抜くように見つめてきた。

たかが口約束。されど、その約束は”命”という重さを持った、大切な約束となった。

彼にとっても、彼女にとっても。

しかし本当のところ、大助はこの千佳子の言葉に、首を横に振りたい思いでいっぱいだった。

出征して、生きて帰って来る者など、ほとんどいないからである。

（それでも俺は…）

首を縦に振った。彼女への慰めではない、自分への戒めである。

戦場で死ぬな、と。自分に言い聞かせ、必ず生きて彼女のもとへ帰って来ると。…必ず。

あれから、二年という歳月が流れた。中国へ出征を命じられた大助は、幸いなことにまだ生きていた。

しかし、彼が生きている場所は、死地同然。いつ死んでもおかしくない状況にある。

そんな中、大助の身体に異変が起きた。夜中に大量の汗を掻き、微熱が続き、咳を込むようになる。

医師から告げられた病名は――…結核であった。

皮肉なことに、この病名を告げられた数日後、大助は日本へ帰国。

千佳子との”生きて帰って来る”という約束は、果たされた。

しかし、こんな身体ではもう、彼女を幸せにすることなどできない。

それにもう二年も時は流れている。

もしかすると、彼女は別の男性と結婚し、幸せな生活を送っているかもしれない。

といっても、戦時中であるため、”幸せに”という可能性はあまりに低いが。

「大助…よく帰ってきてくれた…！」

自宅の布団で、横たわっている大助を、母親は涙目で見つめていた。

しかし、病気は不治の病。数年後には命を失うと決まっている病だ。

それでも母は、息子の生還を喜んだ。この二年間、彼のことを思い、眠れない夜もあったという。

家族が、自分がこんな身体になって帰ってきても、喜んでくれてい

る。

それは、本当に嬉しいことだ。…だが、大助にはもう一つ、気がかりなことがある。

「母さん…千佳子は、千佳子は今、どうしているんですか…？」

よもやこんな身体になってまで、彼女と一緒になりたいなどとは言うまい。

けれど、今彼女が一体どう過ごしているのかは、聞きたかった。

せめて、彼女が元気でいてくれさえすれば…。そう思い母に千佳子のことを問う。

しかしなぜか母は、千佳子の名を聞いた瞬間、顔色を変えた。

どこか言いにくそうな、苦しいような表情になった。…千佳子は？

「千佳子さんは…あんたが中国へ出征してから、心労を患ってね…」

「…！…それで、それで千佳子はどうなったんです！？」

嫌な予感がする。母の言葉に衝撃を受けた大助は、横になっていた身体を勢いよく起こした。

結核の症状とは関係の無い冷汗が、背中を伝う。

…大野千佳子、享年二十一。死因は心労による精神的、身体的衰弱であった。

彼が出征によりいなくなったちょうど一年ほど経った冬。彼女は息を引き取った。

とても安らかな眠りとは言えなかったと、後で千佳子の両親から聞いた。

彼女は、大助がいなくなったその日から死ぬ日まで、ずっと大助の名を口ずさんでいたという。

「千佳子…！…約束を、生きて帰って来るという約束を…俺にだけ残して先に逝ったのか…！」

彼女の遺影が飾られている仏壇の前で、大助は泣きじゃくった。

しかし、自分が彼女を死なせたようなものだ。こんな自分が憎い。

自分と出会わなければ、千佳子は今頃、まだ生きていたはずだ。

こんな、死に損ないの生死に悩み苦しむことなど、なかったはずだ。

「千佳子…！…ごめん…っ」

「大助さん…」

仏壇の前で、千佳子に語りかけていると、彼女の母親が大助に話し掛けてきた。

そしてその両手には一通の手紙があった。

「千佳子が、あなたに宛てた手紙です…。母の私に託していったものです…」

そう言って、千佳子の母親は大助にその手紙を渡した。

あなたが元気で再び故郷の大地を踏むことを、切に願っております。

戯言ですが、私の願いを聞き入れてくださいますでしょうか。

一つだけ、約束して下さい。

最後まで寿命を全うすること。

今度は、平和な時代でお会いできることを願っております。

手紙の内容は、短いものだった。

それでも彼女が自分に何を伝えたいのか明確に分かるものだった。
そして、どれだけ彼女を自分の所為で追い詰めてしまっていたのかも、痛いほど胸に突き刺さる。
涙が滲み、手紙にそれが零れた。文字が少し滲み広がる。
“男が泣くなんて、情けないったらないわ”。生前の彼女の言葉が木霊する。
（また俺に、約束だけを残して…）
この時の誓いは、大助自身の結核が末期となり、息絶えるその瞬間まで、一瞬たりとも忘れなかった。

涙を瞼に滲ませながら、広葉は静かに覚醒した。
（千佳子さん…）
前世の遠い夢を見ていたのだ。
それはまるで、忘れてはならない、と言いたげに定期的に見せられるものである。

時は平成。この時代は平和だ。この時代であれば、必ず彼女と幸せになれる。

あの日の約束を、今度は彼女の隣で果たす。自分一人だけ果たす約束は、もう嫌だから。

必ず、君を見つけてみせるから。

前世の記憶が鮮やかに蘇る度、広葉の決意は固いものとなっていく。

平和なこの世で、まだ見ぬ”彼女”と、巡り合うために。

約束（後書き）

転生すんの早くね？というツッコミはなしということで（笑）

現世

生まれ変わって、必ず彼女を見つけ出す。

そして今度こそ、彼女と手を取り合って、幸せになる。

それが広葉の、前世の約束――。

十二月に入り、冬休みも近いということで、民間説話研究会ではある一つの行事を企画していた。

二年生の広葉はまだ、数回しか経験したことはないが、この研究会では夏休みと冬休みを前にすると、ある行事を行う。

「上映会…ですか？」

すみれがぽかんとした表情で広葉の先輩に問った。

「そう、上映会！レンタルショップで民間説話と何らかの関わりを持ったＤＶＤを借りてきて、この部室で一日上映会を行います！」

広葉とすみれの先輩は勢いのある弾んだ声で、大方の説明をすみれと小夜にする。

“研究上映会”と命名されているこの行事は、冬休みに入る前日に行われるものだった。

三、四本の民間説話と関わりを持つＤＶＤを、上映しよく観察し、最終的に個人的な感想や意見をレポートにして部長に提出する。

提出期限は冬休み明け。そこで集められたレポートの内容を格付けし、上位に挙がった部員は下位だった部員に罰ゲームを与えるという、スリルな内容である。

「罰ゲーム…下位だったらどうしよう…」

“罰ゲーム”というルールに注目したすみれは、青い顔になった。

自分も最初の上映会の時はどうなることかと思い、こんなふうに青ざめていたな。

そう思いだした広葉は、すみれにコッソリと助言をする。

「大丈夫ですよ、女性部員にはそんなに恐い罰ゲームは与えないですから！」

“楽しくやろう”と、付けくわえ、すみれの不安を解消させるように言う。

すると、広葉の言葉にすみれも安心したのか、青ざめていた顔はぱっと明るくなった。

「そうですね…楽しくやらせていただきます…！」

普段は大人しく、なかなか表情の変化は乏しいすみれだが、今回は稀に見る目を細めての笑顔。

（こんな笑顔も見せるんだ…）

そんなすみれの表情の変化に、広葉は少し意外に思う反面、驚きもした。

部室内は今日、冬休み前日に行われる上映会の話で盛り上がった。

どんな映画をチョイスしようかとか、何時から始めようかとか…”あの夢”からは想像もできない程、平穏な日であった。

そしてあっという間に、冬休み前日を迎えた。

兄の通っている大学とは別の大学に通っているため、兄との冬期休業の日程とは若干のズレがある。

兄の黄楊は十二月の二十七日からだが、広葉の大学は二十二日からだった。

「でも、どうして冬休みの前日何ですか？春休みの方が期間は長いのに…」

大学の春休みは長い。そう言われれば確かにそうかもしれないが。

「期間の長い夏休みと、期間の短い冬休み明けに出すレポートを比べられるんです。…どれだけ雑なのか…とかね」

実際、広葉が一年の時、この独特な夏休みと冬休みの時間の差に圧倒され、自分でも上出来だと思ったレポートを夏休み明けに出したが、その後の冬休みのレポートは散々だった。

前のレポートと比べられ、評価が下げられることケースはかなり多いという。

初めての上映会を迎える部員は、大抵そうなる。

「でも、秋元さんと星崎さんは今回が初めてだし、とりあえずは楽しんで鑑賞しようよ」

まだ民間説話の初心者であるすみれには、第一に映画を楽しんでもらいたかった。

部室内にある中型のテレビの前に、部員たちが集う。

テーブルにはお菓子や缶ビール、ジュースなども置いて、ちょっとしたパーティのようでもあった。

広葉の隣には、すみれが座りその隣には彼女の親友の小夜が座った。

すみれがこの民間説話研究会に入部してから、小夜は元々興味があったため、どんどん民間説話の知識を身に付けていっていた。

しかし、あまり興味があったわけではないすみれは、民間説話に対しての呑み込みが遅い。

部員たちと話で盛り上がる小夜とは対照的に、すみれは戸惑いつつも部員たちの会話を聞いている、という状態なのだ。

そんなすみれを何かと気に掛けてくれるのが、広葉である。

そのためすみれは、他の部員たちと話すよりも広葉と会話することの方が楽しみだった。

もちろんそこには、民間説話の話も混じるが、全くそれに興味がないわけではないので、途中で他の会話を取り入れながらそれを話してくれる広葉が、すみれにとってはちょうど良かった。

最近になっては、すみれが広葉と会話する光景が、この部室内の一つの風景のようなものにもなってきている。

たまに”仲良いね”とか、”付き合っちゃえば”とか、冗談交じりに言われるのだが…。

それを部員から言われる度に、すみれは広葉の表情が硬くなるような気がしていた。

実際、そういったからかいは大学生にもなれば、軽く受け流してもいいとは思う。

（真面目な人なんだなぁ～…恋人も作ったことないって言っていたし…）

上映会が始まり、物語がどんどん展開していく中、すみれの意識はいつの間にか画面から、隣にいる広葉へと移っていった。

横目でちらっと彼を見ると、ずっと映画に集中している。

（優しいし、穏やかだし、ちょっと固いところはあるけれど…）

素敵な人だな…と、すみれは思った。

上映会が終了したのは、午後八時過ぎ。見た映画は現代ファンタジーに該当するものだった。

「じゃあ、レポートは冬休み明けに一斉提出な。忘れたやつはそこで罰ゲーム決定だ」

得意げな顔で言う先輩に、苦笑する部員たち。広葉とすみれもその内の一人だった。

「すみれ、私この後バイトだから、先に帰るね」

いつもは一緒に帰るはずの小夜が、今日は九時からアルバイト先か

ら出勤を頼まれていたらしい。
慌ただしく自分の荷物をまとめて、”お先に失礼します”と言うと、小夜はダッシュで帰っていった。
予想以上に時間が長かったのだろう。
「星崎さん、大丈夫かな。夜道は危険だろうに…」
慌ててアルバイト先に向かった小夜を心配そうに広葉は見送った。
その言葉にすみれは苦笑して言った。
「大丈夫ですよ、小夜はああ見えても、柔道を習っているんです」
「それは凄いね！なら、大丈夫か」
最近の痴漢やチャラ男ならば、柔道を嗜んでいる女性の方が強いだろう。
「それじゃあ、秋元さんも柔道を…？」
すみれと小夜は学科が違うため、きっとそれ以外の共通点があるのだろうとは前々から思っていた。
「いいえ。高校が同じなんです。私は、そういうのは怖くて…」
「あっ…そ、そうですよね…高校が。普通そっちの方を考えるよね」
この時すみれは、少し抜けている所があるのだなと、広葉の新たな

一面を見つけた気がして楽しくなった。

くすっと笑うと、広葉は恥ずかしげに俯く。どうして笑われたのか、何となく分かったのだろう。

「永瀬先輩」

ふと、すみれが広葉を呼ぶ。俯いてもいられなくなり、”はい”と返事をしてすみれと視線を合わせる。

「途中まで、一緒に帰りませんか？」

本日もかなり冷え込みが激しい冬の街。広葉とすみれは肩を並べて歩く。

クリスマスももうじきということで、行事使用のイルミネーション、巨大なツリーなど辺りはクリスマス気分で染まっていた。

クリスマスが終われば、次は新年に向けて街はその色を変える。

「日本人って、気が早いですよね」

そんな世間話をしながら、時には物珍しい店を見つけ、外からその店の様子を眺め、また歩く。

それを繰り返していくうちに、年ごろらしいある感情が二人に湧いた。

「よかったら、どこか寄り道していかない？」

「よろしければ、どこか寄っていきませんか？」

ほぼ同じタイミングで、ほんの少しだけ言い方が違うだけで、二人は互いを誘いあった。

視線が合い、二人は思わず笑ってしまう。

「それじゃあ、とりあえず夕食にしません？」

まだ夕食を済ませていなかった二人は、適当に目に入ったファミリーレストランで食事を取ることにした。

この時、広葉は少し、自分自身を不思議に思った。

そもそも九時くらいまでには必ず家に帰る自分が、なぜこんな時間に人を誘ったのだろう。

しかもそれは女性で。今までは女性と二人きりになること自体、あまりなかった。

千佳子以外には、あまり興味がなかったから。

よくよく考えてみると、赤の他人から見れば自分とすみれは恋人同士に見えるだろう。

普段からそういった誤解すらされるのが嫌な自分が、なぜ…。

「そういえば、永瀬先輩……」

自分と視線を合わせている女性の笑みが、なぜだかとても可愛く見える。

なぜだろう…。

「あれ？父さん、広葉は…」

九時過ぎに黄楊は自宅に帰っていた。ミホのアルバイト先に寄っていたのである。

「まだ帰って来てないよ。珍しいな、広葉が九時を過ぎても帰ってこないなんて」

リビングでテレビを見ていた父は、黄楊に目もくれず時計を見ていた。

確かに、珍しい。真面目な広葉がこんな時間になっても帰ってこないということが。

「へぇ…そう…」

大方、サークルの部員たちと盛り上がっているのかもしれないな。

そんなことをぼんやりと考えながら、黄楊は自室に戻った。

「寒っ…」

自室は暖房を入れたばかりでまだ冷え切っている。冬は嫌いだ。

私服からジャージに着替え、ベッドに潜り込む。

布団も最初はひんやりとしていたが、徐々に温かくなってきた。

眠いし、寝たくなってきたが、どうも今日は眠りたい気分ではなかった。

（でも、眠い…）

まだ九時が過ぎたばかりだというのに、この眠気は何なのだろう。

急激な睡魔が黄楊を襲った。そう思った瞬間、意識は夢の中にあった。

眠たいのに、眠りたくない。彼がそう思ったのは、この夢を見ることになるだろうと、解っていたからなのだろうか…。

現世（後書き）

すみれさん視点も入れて。次回は黄楊の前世で～す（＾Ｏ＾）／

相愛

戦国時代中期。ある大名家に仕える家臣の姫に、恋した男がいた。
家臣の家来であるその男は、いずれ来る出陣に向け日々、鍛練を積んでいる。
恋に現を抜かしている時ではない。ここで手柄を取って出世し、そしていずれあの姫を…。
それは、永瀬黄楊の遠い記憶である。

永正八年、十月。季節は秋。
三村元信は二年前に戦で父を亡くし、現在は三村家の主人として、大名家の家臣である大久保家に仕えている。
武士として立派に出世し、大久保家一の家来と呼ばれるようになることを目標に、元信は今日も自分の屋敷で鍛練に勤しんでいた。
「元信…」
鍛練に励む中、元信に声を掛けてきたのは兄の京吉だ。
京吉は身体が弱く、昔から持病を患っているため、父の後を継ぐこ

とを辞退した。

「兄上、おはようございます！身体の御加減はいかがですか？」

中低音の弟の声に、兄は口元を緩め”大事ない”と一言返した。

「時に元信。そなた、妻を娶る気はないか？」

最近、よくこんな話を兄にも母にも持ちかけられる日々が続いていた。

その度に元信は顔色を変え、呻きたくなる衝動に駆られる。

一家の大黒柱である以上、それ相応の身分の女子を娶り、子を産ませ、彼の後継者を作ることは必要だろう。

しかし、彼にはどうしても今は妻を娶る気にはなれなかった。想い人がいるのである。

それはもうすぐ手の届かない、遠いところへと羽ばたいていってしまうのだが。

三村家が仕える大久保家には、今年十七歳となった一人娘がいた。

つまり、元信の主人の娘ということは、元信にとっては、姫様と呼ぶに値する、彼よりも高貴な女性だ。

菊姫。十七歳という若さながら、妖艶な美しさを持つ大久保家の次女である。

「私は、まだそれどころではないので…」

そう。元信は菊姫への想いを捨て切れずにいた。

しかしその想いも、もうじき捨てずにはいられなくなる。菊姫は今年の冬に、輿入れが決まったのだ。

相手は隣国の大名家の家臣、田辺十三郎の息子である。

実は大久保家が家臣として仕えている大名家は、その隣国の大名家と同盟を結んでいた。

それも今回の菊姫の輿入れに影響している。姫はもう十七歳。いつ結婚してもおかしくない年頃。

決して手の届かない存在だとは分かっていても、改めてその話を聞くとやはり悔しい気持ちになった。

本当に、元信の一目惚れであった。庭の花を眺めていた可憐な姿が目蓋の裏に浮かぶ。

あれは元信が九つの時。大久保家の庭の池で魚を眺めていると、ふっと横から誰かの気配がした。

蒲公英を両手に持ったその女性は、当時はまだ六つの菊姫である。

その姫が、今ではあんなにも妖艶な美しさを持って、元信の手の届かない遠いところへいってしまう。

（菊姫様…）

菊姫は元信のことなど、気にも留めていないであろうことは重々承知だった。

けれど…。

（俺は、菊姫様が好きなのだ！）

幼い頃から積み重なっていった想いは、日に日にその想いを強く、深くしてゆく。

残酷なほどに、彼女を今まで想ってきた。顔を見る度、声を聞く度に好きになっていった。

「今日は、大久保家で菊姫様輿入れを祝っての、宴だったな…」

兄は深刻な面持ちになり、刀を振るうのも忘れ棒立ちになっていた元信の想いに気付いているらしかった。

何食わぬ顔で元信に言っているようであるが、実はそうではなく。戒めにも似た、どこか強い口調。

「姫様は、ちゃんとお幸せになる」

「……」

“だから諦めろ”と、兄は言いたいのだろう。長年の想いは、明日の宴で終止符を打てと…。

（そのようなこと…俺にできるのだろうか…）

兎にも角にも、明日は宴。しかも、想い人が他の男と結婚するということへの祝いの席だ。

めでたいが、元信にとっては死ぬことよりも辛い日になるのは言うまでもないだろう。

菊姫輿入れの祝いの宴が、大久保家の広間で催された。

大久保家の主やその一家、大久保家の家来たちを含め今、盛大に行われている。

菊姫は当然のことながら上座に、一介の家来である三村元信は下座に。

表面では姫の輿入れを祝い、笑顔を絶やさずしているものの、胸中は引き裂かれそうだった。

隣の席の家来と、何気ない会話を酌み交わし、出来るだけ菊姫の姿を見ないようにした。

見てしまったら、未練はまた大きくなるだろう。

「…父上」

そんな元信の葛藤の中、華やかな宴の席でそっと大久保家主人に声を掛けたのは菊姫だった。

声を発した輿入れ前の姫に、元信以外の家来たちや一族が見ると、お菊の表情は婀娜っぽさのある妖艶な笑みを浮かべている。

しかし、その中にも何故が儚げであり、悲しげに映るのは、気のせいだろうか。

そして父である主人に、意外なことを口にした。

「元信と、話したいことがあるのです」

その姫君の言葉に、はっとした元信は今まで見まいとしていた愛しいその人へ視線を向けた。

上座と下座、別々の席に座る二人の視線が、合った。

「元信は、私にとっては兄弟のようなもの…別れの挨拶なしでは、輿入れなどできませぬ」

騒然とした空気が宴の席に湧き起こった。

無理もない、もうすぐ輿入れするという姫が、一人の男と二人きりで話したいと言い出したのだ。

しかし、菊姫の父である元信の主は、顔色を変えず無言で頷き、姫の申し出を許可した。

菊姫は本日の宴の席の主役だというのに、元信を連れ出して屋敷の庭に出た。

夜の屋敷内の庭は、不気味なほど静かだ。

しばらく二人は黙ったまま、暗い庭の中、佇む。すると先にその静寂を破ったのは、菊姫だった。

「元信…。ここでお前と小さい頃、よく走りまわしましたね」

「……」

「出来ることならば、私はあの頃に帰りたい」

「……」

「ずっと、あのままお前と、走り回っていたかった…」

「……」

元信は何も言えなかった。いや、それ以前に声が出なかったのだ。

このように、菊姫に呼び出され、公衆の面前で”二人きりで話したい”と彼女が言った瞬間から、この恋を忘れることなど、無理だと悟ったからだ。

だが、その想いはもう届かない。

「元信。なぜお前は、大久保家の家来だったのだろうな…」

「……」

「なぜ私は、大久保家の姫として生まれてきたのだろうな…」

「……」

元信から、何の反応も帰って来ないことを知りながら菊姫は続けた。

「なぜ、私とお前は、出会ったのだろうな…」

その言葉を聞き、元信は出なかった声を無理に振り絞って、菊姫に答えた。

「私は…姫様に、出会えて幸せでありました…！」

その声は、自分でも疑ってしまうほど、弱弱しくしゃがれている。

鼻の奥がつんとして、男だてらに涙などを目蓋に溜め込んでいるのが分かる。

情けない、情けない。情けない…！

そう思っても、この衝動的に込み上げてくる感情を、抑えることはできなかった。

…あなたをいつか、手に入れたい。身分違いも甚だしいと分かっている。

けれど、いつか…きっと…。

「何だと…！それは真か！」

菊姫が輿入れして六年という歳月が流れた。大久保家に緊張の嵐が吹き荒れていた。

大久保家だけではない。大久保家が仕える大名家もまた、困惑していた。

菊姫が嫁いだ家臣の主人である、同盟国の大名が大久保家の主人を裏切ったのである。

大久保家の主人は、つまりは三村家にとっても主人というべき存在。大久保家広間に集った主人と家来たちの前で、大名家からの伝令が、戦の準備をせよとの報告とともに、裏切りという情報を持ってきたのだ。

（姫様がいる国と、この国が戦…！？）

それは、元信に”好きな人の国を潰せ”と言っているようなものである。

この戦に勝利しても、菊姫が無事こちらの国に戻ってくることが出来るという保証もない。

（姫様…！）

一途な想いも虚しく、戦の日はやってきた。ある家臣の屋敷内で、女の声が木霊している。

「なぜです！なぜ父のいる国を裏切ったのですか！？」

菊姫、いやお菊の方の声である。動揺していたのは大久保家だけではなく、菊姫もそうであった。

自分の部屋で、自分の侍女に怒りをぶつける。

「なぜ！この国は私の故郷を裏切ったのです！」

しかし、菊姫の憤りは、決してこの国の大名に届くことはなかった。止められなかった戦を前に、彼女もまた元信のことを想いながら、彼が戦で死なぬよう祈り続けた。

戦は刻一刻と激しさを増し、もうじき終わるだろうと思われる頃には、大量の死者が出ていた。

戦は思っていた以上に、大きいものだったのだ。

（元信…！）

隣国に嫁いでからも、菊姫は彼のことを忘れていなかった。

もう六年にもなるが、幼い頃から想っている人のことを、そう簡単に忘れられるはずもなく。

ただ、彼の命運を祈って…。

戦は終わった。負けたのは大久保家側の大名家であった。

落城した大久保家の大名は城内で命を落とし、大久保家の主人もまた戦死した。

しかし、三村元信は生きながらえ、他家の家臣たちとともに他の国へと落ち延びていたのだ。

それを知る術もない菊姫は、自身の父親が戦に命を散らせたこと、また自身の故郷が敗れたことに喪失感を覚える日々を過ごす。

（きっと…元信もあの戦で…）

元信は生きている。しかしそれを、菊姫は知らない。

菊姫が自身のことを案じている。しかしそれを、元信は知らない。
この二人は年老いるまで生きた。互いの想いを全うしながら。
晩年の元信は自身の生涯をこう綴った。
――私の生涯は、ただ一人の姫のためにあり。
元信は同じ主人の家来の一族から養子を貰い、生涯独身だった。
自分の生涯の恋心を、ただ一人の女性に明け渡して…。
いつか、彼女を手に入れる。その日のために、想いを馳せて…。

（くだらない…）

煩わしい夢から解放された黄楊は、広葉の顔を思い浮かべた。
彼の前世は兵隊だったという。皮肉なことに自分の前世もまた、戦場に向かう武士だった。
そりゃあ、動乱の世で想い人と平和に過ごせるカップルなんてそうそういない。

だからこの平和な世界で、前世の人と結ばれたいと願う気持ちは分からなくもない。

けれど。

（広葉…もう、解放されないか…？）

自分も解放されたように、古い翼を捨てて、新しい翼で羽ばたいて…。

現世で出会った素敵な女性と、結ばれて。

いつか二人で、笑い合おう…。

動揺

あの日。初めて女性を夕食に誘った。

「ご、合コン…ですか…？」

「は、はい…その永瀬先輩が宜しければ、なんですけど…男性の方で一人、ドタキャンした人がいたらしくて…周りの人に他の男性が誘っても、なかなか引っかからないらしくて…」

だからといって、女性チームが合コン相手の男性を誘うのはどうであろう。

というよりも、合コン…。

広葉は恋愛経験がなく、特定の女性と付き合ったことはない。

自分が参加しても、周りについていけなくなって、逆に迷惑を掛けるかもしれない。

自身がないことを理由に申し訳なく断った後、すみれは深刻そうな表情を浮かべた。

「どうしよう…」

広葉は、そんなすみれの困った顔に、更に心苦しくなる。

確かに自分は女性の扱いは上手な方ではないし、恋愛は千佳子の生まれ変わりと出会うまですることはないだろう。

合コンなんてものに出たところで、きっと何も変わらない。

（でも…）

目の前に困っている人がいて、しかもそれはすみれで…。

経験がないということを利用して、困っている人を見捨てるということは、どうしても躊躇われた。

「ぼ、僕っ…合コンは経験したことないけど、埋め合わせってことなら、協力するよ…！」

彼女の助けになりたい…。こんなふうに思うのは、初めてのことだった。

合コンは明日のクリスマス。恋人のいない男女が、聖なる夜に新たな恋を求めて集うのだ。

いつも通り大学から帰宅してきた黄楊は、何やらリビングのテーブル椅子に腰掛け、そわそわしている弟の様子に気付いた。

頭を片手で抱え、少し不安そうな表情をしている。

「どうした？広葉」

「あっ…兄さん…」

リビングのドアを開ける音も聞こえなかったのか、広葉は何か悩んでいるようだ。

また前世のことでも考えているのかとも一瞬思ったが、その時の表情とは少し違う。

何か別のことで、珍しく広葉は悩んでいるらしい。

そんな弟の様子に、何があったから知りたい黄楊は、遠回しに探りをいれた。

すると、返ってきたのは意外な一言。

「兄さん…合コンって出たことある？」

一瞬、呆気にとられたが、すぐにその言葉の意味を聞き出すと、黄楊の機嫌は高揚した。

（少しは進歩してきたじゃないか…）

後輩の女子に合コンの出席を頼まれて、断り切れなかったと広葉は言った。

しかし、普段の広葉ならどんなに申し訳なく思っても断っているだろう。

彼は、その頼まれた後輩のことをどんなふうに思っているのだろうか。

ただの可愛い後輩と思っているのか、それとも普段湧かない特別な感情でも芽生え始めているのか。

どちらにせよ、その合コンがきっかけで、広葉の人生の生き方を少しは変えることができるかもしれない。

「合コンなら何度か出たことあるよ。別に気負うこと無いんじゃないか？普段通りしていれば…」

「そう、かな…」

黄楊も初めて合コンにいった時は緊張した。最初は誰でもそうだろう。

中にはそうじゃない奴もいるかもしれないが、少なくとも人間”初めて”のものには、誰しも緊張するものだろう。

「リラックスしていけよ、明日はクリスマスなんだから」

明日は、恋人たちにとっては聖なる夜。カップルが一番気合いを入れるイベントだろう。

そこで何が起こるかは分からない。

好きな人に告白してＯＫしてもらえる人もいれば、玉砕する人もいる。

記念すべきイベントだというのにケンカして別れるカップルも、７０億人近い人間が、この地球上にいるのだからいるかもしれない。

果たして永瀬兄弟は、どんなクリスマスとなるのだろうか…。

クリスマス当日。永瀬広葉は合コンの日だ。

誘われたのはすみれからだったが、当日は男性陣と待ち合わせすることになっていた。

待ち合わせ場所は現地。合コンの場所は居酒屋だった。男女の比率は四対四。

基本的な合コンの人数である。

合コンに参加する男性陣は、すみれと同じ学部の友人とその知り合いだった。

女性陣もそうであるらしい。待ち合わせの時間よりも一時間早く集合した男性陣は、それぞれ自己紹介をし、迎える女性陣たちを待っていた。

「永瀬ってさ、合コン初めてなんだよね？」

広葉の隣に座った彼と学部違いの同級生が話し掛けてきた。

「う、うん…」

初めて会う人と、初めての合コンに緊張を隠せず、戸惑う広葉を同級生は不思議そうに眺めた。

「意外だな。結構良い男じゃん、永瀬って。彼女作ったこともないんだろう？」

彼はすみれと同じ学部で、彼女の先輩だった。その情報は彼女から流れたのだろう。

「あはは…」

まさか前世の女性を探しています、なんて言えない広葉は、苦笑いを浮かべ適当に受け流す。

しかし、同級生はそれでも納得できないと言いたげに広葉を眺め続ける。

「勿体ねぇなぁ～…。秋元も結構、可愛いじゃん。付き合ってみれば？」

「ええっ！？」

思いもよらない同級生の勧めに、広葉は動揺した。それこそ、顔を少しだけ赤らめて。

（え…？）

心臓がドキドキする。今まで、この手の言葉は何度か聞いてきた。けれど。

（どうして、だろう…今までとは、少し感じが違う…）

今までなら、そんなことを冗談半分で言われても、半ば本気で言われても、不快感しか起こらなかったのに。

すみれは確かに、優しくて綺麗で素敵で、一緒にいて楽しい人だ。だけど。

（僕には、千佳子さんがいるのに…）

まだ巡り合えていない、前世の恋人。彼女と約束した、確かな記憶。

彼女と会うまで、自分は恋などするはずがない。では今、なぜ自分は動揺したのだろう。

「永瀬…お～い、聞いてるか～？」

同級生の声も聞こえず、広葉は考える。

ドリンクの注がれたグラスを見つめながら、放心状態となっている。

「またですか？永瀬先輩」

「…っ！！」

笑いを含んだその声色は、今まさに広葉が考えていた女性のものだった。

合コンの待ち合わせ時間になったのである。

放心状態になる彼を見慣れ掛けているすみれは、彼を見つけた瞬間にツッコミを入れたのだった。

すみれの以外にも、二人の女性が顔を見せている他、後ろから足音も一つ聞こえる。

「待ってました！女性陣っ！いやぁ～可愛い子ばっかで嬉しいよっ！」

合コンを計画した男子一名が、待ちに待った女性陣の登場に歓喜するなか、広葉はすみれを見つめていた。

視線を合わせていると、なぜか気恥ずかしくなってしまい、堪らず目を逸らす。

「やあ男性陣たちっ！女性陣のお出ましだよぉ～」

最後に登場した女性も顔を見せ、合コンの準備が整い始める。

そわそわしているわけにもいかず、広葉は俯かせていた頭は思い切って上げた。

…その瞬間、彼の目に映ったものは、遠い記憶を呼び起こさせた。

クリスマスは恋人たちにとっては重要なイベントである。

無論、彼女を持っている黄楊は、恋人のミホと現在デート中。

大学の講義が終わった後、二人は都内の遊園地に向かった。

ミホが前から行きたがっていた遊園地で、カップルのデートスポットとしてもよく利用されているらしい。

理由は、クリスマス前になると特別なイルミネーションが装飾される大きな観覧車があること。

そして今、二人はその観覧車の一番上まで上がったところだった。

「綺麗…」

残念ながら、冬ならではのナチュラル演出である雪は降っていない。

しかし、ミホの言うとおり、観覧車の頂上から見下ろす夜の街はきらきらと輝いていた。

（今頃、広葉はどうしているだろう…）

そんなことを考えながら、夜景を見下ろす可愛い恋人の姿を黄楊は見つめていた。

プレゼントはまだ渡していない。この後の夕食が済んだら渡そうかと、色々と思案しているからだ。

「ミホ…」

折角のクリスマス。たまには恋人に甘い一言や二言、言ってもいいだろう。

「えっ！？何…！？」

ミホは名前を呼ばれると、過剰反応した。おそらく、恋人に何か言われたいのだろう。

普段、黄楊はあまり”好きだ”とか、”愛している”とか、直接的に彼女に改めて告白することはしなかった。

だから、今夜だけ。

「ううん、呼んだだけだよ…」

しかし、空気的に照れ臭いのか、はたまた別の理由からか、黄楊はまた言いそびれた。

（俺って案外、恥ずかしがり屋なのか…？）

自問自答しても、答えは返って来ず、ミホは少し寂しそうに、”な～んだ”と言ってまた視線を夜景へ向ける。

そうしているうちに、やがて二人を乗せたゴンドラは地上へ降りた。

「はぁ〜…楽しかった！ねぇ、次は夕食だったよね？何処に連れてってくれるの？」

今日、デートをリードするのは黄楊である。

いつもはミホに付き合ってばかりだが、クリスマスくらいは自分がリードしたいと思ってのことだった。

「この遊園地の付近にある、レストランだよ。付いて来い」

観覧車から離れ、二人は肩を並べそっと歩き出す。

あの観覧車は定評があるのか、やはり今日は人が多かった。

結構な人ごみの中、離れないように手を繋いで、黄楊はミホと会話し、ゆったりと歩く。

――…ふっと、そんな人ごみの中、黄楊は目を見開き、足を止めた。

一瞬、彼の世界がスローモーションのようになって見える、気がした。

「…キヨ君…？」

茫然と佇む黄楊を、ミホは不審に思い声を掛ける。しかし、ミホの声は黄楊には全く聞こえなかった。

それよりも、何よりも自分の目に飛び込んできたものを追いたいという気持ちが強くあって…。

「ミホ…ごめん。ちょっとここで、待っててて…」

「えっ！？」

繋がっていた手は、黄楊によってすっと離れた。

もう一度”ごめん”というと、黄楊はさっと走り、人ごみを掻きわけ、ある一つの影を追う。

そして……――追っていた人物の肩を、自分でも少し強引かと思われる力で掴んだ。

「えっ…？」

黄楊が追っていた人物。それは、一人の女性である。

その女性がいきなり肩を掴まれたことに驚き、ばっと黄楊の方を振り返った。

（――あっ…）

彼女の顔を間近で見た瞬間、黄楊は切なげに眉を顰め、心臓がどきりと跳ねたのを感じた。

俯かせていた頭は思い切って上げた瞬間、彼の目に映ったものは、彼にとって、衝撃的なものだった。

最後に現れた女性。その人の名は橋場柚。別の大学の一年生である。

しかし、それだけならば何てことはない。ただ、その女性は…。

（千佳子さん…？）

そうなのだ。この柚という女性こそ、広葉が生まれた日から、いやその前からずっと求めていた人。

大野千佳子の、生まれ変わり。広葉には目に映った瞬間、分かった。

たとえ相手に、前世の記憶がなかったとしても、本能的な何かで分かるのだ。

「……永瀬先輩…？」

合コンが始まってからというもの、黙りこくってしまった広葉を、すみれは心配そうに見つめていた。

広葉はやっとその声に反応をすると、”何でもないよ”と無理に笑顔を作って会話に参加し始めた。

だが、そんな広葉の胸中は今までになく複雑な気持ちとなっている。

ずっと求め続けてきた前世の人に、呆気なくではあるが、ようやく会えたのだ。

普段の自分から想像すれば、必ず喜んで、彼女に積極的に話し掛けてこの恋を成就させようとするはずである。

しかし、なぜだろう。広葉が好きなはずの柚を見て、前世の恋人だとは分かった。

けれど、それと同時に訪れるはずであろう、込み上げてくる”気持ち”が…ない。

広葉はそんな自分自身が信じられず、そして戸惑う。

（どうしてだろう…。嬉しいはずなのに…こんな、何の感情も湧かないなんて…）

「永瀬先輩…？」

その代わりに、彼女の声を聞く度に、心臓が跳ねるなんて。

こんな自分、認めていいわけないのに…。

「あ、あの…」

黄楊の手に肩を掴まれた女性は、心底驚いたようだった。

無理もないだろう。全く知らない人物から肩を突然、掴まれたのだから。

黄楊も我ながら”しまった”と思った。これではまるで、人違いだと思われるような空気だろう。

でも…自分はこの人を知っている。女性にはどこか艶やかな色気があった。

長い髪はストレートでいかにも柔らかそうである。儚げではあるが、真っ直ぐな瞳。

「君…名前は…？」

女性は突然問われ、黄楊を訝しげに見つめた。女性の隣には、彼女の友人らしき姿がある。

その友人も”ねえ、この人誰？”と、いかにも不審者を見つめるような目で黄楊を見ていた。

しかし、最初こそ眉を顰め、怪訝な顔をし黄楊を見ていた名を問われた女性は、ふっと穏やかな表情を見せる。

そして言った。

「高谷椿姫です」

別離

それは聖なる夜の出来事。自分に言い聞かせ続けてきた偽りの”自分”が、崩壊した日。

本当はずっと、君を探していたんだ。そう思い知らされた日だった。

「高谷椿姫です」

そう黄楊に名乗った女性こそ、彼の前世が恋した相手、菊姫の生まれ変わりであった。

ミホと手を繋いで人ごみを歩いていて、ふっと彼が足を止めたのは、椿姫を見つけたからである。

実は黄楊自身、なぜこんなことをしたのか最初理解ができなかった。

だが、彼女の顔を間近で見た途端、そんな疑問など忘れ、込み上げてきた愛しさを知った。

この時、黄楊は初めて自身を理解したのである。

広葉に前世を捨て、新しい自分に本当の意味で生まれ変われと、遠回しに言っていたのは、広葉のためではない。

自分自身に言い聞かせていただけだったのだと。

今、前世で恋した相手に向き合っているのは、紛れもなく自分が起こした感情からだ。

高谷椿姫と名乗った女性は、どこか苦笑交じりに茫然と自身を見つめてくる黄楊に話しかけた。

「あの…どこかでお会いしましたか？多分、人違いだと思うんですけど…」

無論、前世の記憶など無くなっている椿姫には、黄楊の行動はただの人違い。

黄楊もそう思われるであろうことは、肩を掴んだ瞬間悟った。

（そうだ…今なら、引き返せる…）

大体、弟にあれだけ前世はくだらないと公言していた自分が、それに呑まれるなんて滑稽すぎる。

そうだ、これはただの人違いだったんだ…。

「そうだったみたい。ごめん、楽しんでるところ驚かせて。じゃあ…」

そう言って、黄楊はミホの元へ戻ろうと椿姫に背を向け、一歩二歩と歩き出した。

「ちょっと待ってください」

しかし、そんな黄楊の決意を揺るがすかのように椿姫は彼を呼びとめた。

走り去ってしまいたいと思う一方で、それはできないと思う諦めが黄楊を支配する。

椿姫はバックからメモ帳のようなものを取りだし、それに何かを書くとその切れ端を黄楊に差し出した。

少しの間、躊躇していた黄楊は、何かを決意しそれを受け取った。

そこに記されていたものは、彼女との繋がりを持てたも同然の内容であった。

「私の通っている大学と学部です。今は冬休みですから、来るのは年明けになりますが、宜しかったら来てください」

彼女の行動はまるで、心の中にいる誰かが、”行きなさい”と言っているように見えた。

連絡先の記された紙切れと椿姫を交差に見つめていた黄楊に対し、彼女は何か面白そうなものを観察しているような眼差しで彼を見ていた。

「それじゃあ、私はこの辺で。素敵なクリスマスを…」

その、黄楊にとっては懐かしい眼差しを持った女性は、少しだけ俯いてお辞儀をすると、彼に背を向け歩き去っていった。

また、辺りが一瞬、スローモーションになって見える。

黄楊は椿姫の後ろ姿を名残惜しげに見送ると、自らも自身の恋人がいる場所へ歩き出した。

椿姫から受け取ったメモ書きを、ぎゅっと握りしめて。

……――今まで、幾人もの女性と付き合ってきた。何かから逃れるように。

付き合っては別れ、別れては付き合い、その繰り返し。

だが、その誰にも、”好きだ”とか、”愛している”とか、直接的に恋人に告白をすることはなかった。

“付き合わない？”、”お前は可愛い”、それぐらいなら今まで散々、言ってきた。

けれど…好きだと言えない。愛していると心から思えない。それは…。

（あなたがずっと、好きだったから…）

黄楊にとって、唯一心の底から愛しいと思える女性は、結局彼女しかいなかった。

菊姫、いや…高谷椿姫という女性しか。

すっかり人が少なくなった冬の街を広葉は虚しい気持ちを抱え、歩く。

四対四の合コンは居酒屋の時点で終わり、二次会は開かれなかった。

結局、広葉は合コン中もすみれと会話する時が多かった。柚とは一言二言交わしただけ。

連絡先は一応、携帯の番号とメールアドレスを交換はしたのだが。

「今日は、無理をさせてしまったみたいで、ごめんなさい」

広葉の隣を歩くすみれは、やや申し訳なさそうに苦笑して彼に謝罪した。

「い、いいえ！そう言うわけじゃないんだ…ただ、何ていうか…」

広葉は合コン中、時々どうしようもない息苦しさを感じ、溜め息を吐いてしまうことが何度かあったのだ。

自分なりに溜め息は吐かないようにしていたが、それでも思わず出てしまう時があった。

それがすみれにとっては、退屈そうに映ったのかもしれない。

実際の広葉の胸中は、”退屈”だったわけではない。

二十年間、想い続けていたはずの女性にあっても、何の感情も湧かなかったことへの苛立ちからである。

そんな自分が理解できない。だがその代わりに、一つ分かったことがあった。

クリスマスの夜。正確にはもう終わろうとしている二十五日。

夜の街を、肩を並べて歩く隣の一人の女性に対して、自分が抱いている感情である。

今も、ドキドキしている。

脳裏には柚の影がチラつきつつも、それでもこの胸の高鳴りは隣にいる女性が原因だった。

二十年間、想い続けていたはずなのに…。そう思うと。

広葉は人影の少ない歩道に、ふと歩みを止めた。

それに気付いたすみれも歩みを止め、数歩ほど広葉の前に出ていたため振り返り、彼を見た。

「……――永瀬先輩…！？」

すみれはこの時、広葉の瞳から、彼の頬に伝い落ちてゆく雫を目にしたのである。

彼がなぜ泣いているのか、なぜこんなにも辛そうな表情を浮かべているのか。

すみれに知る術はない。困惑した彼女は広葉に歩み寄り、バッグから探しだしたハンカチを、そっと彼に差し出した。

しかし、広葉はそれを受け取らない。その代わりに必死で言葉を紡いでいく。

「ご、ごめん…！…ただ……――ずっと会いたかった人に会えて…！…」

「……」

自身の腕で涙を拭う広葉の言葉を、すみれは口を挟むことなく、ただ黙って聞いてくれた。

「――…その人と、ずっと約束してて……ずっと前から、約束してて…っ…けど！…」

途切れ途切れに、ゆっくりと言いながら、広葉は前世の記憶のことを思い出していた。

大野千佳子という女性と交わした、約束。生まれ変わって、彼女を見つけ出すという約束。

そして今日、彼女の生まれ変わりである橋場柚という女性に出会っ

た。

千佳子に似ていて、爽やかで清々しい笑みを浮かべる、素敵な女性だった。…けれど。

「…その約束を…っ…守れそうに、ないんだ…」

この言葉を放った時、広葉の表情は沈痛なものから自嘲的な笑みに変わっていた。

どうしてだろう。いつからだったろう。

千佳子の存在が、自分が思っていた以上に遠くなっていったのは。

これではまるで、黄楊と同じではないのか。前世の恋人以外の女性に恋をするなんて。

「僕…っ…ずっと、その人のことが、好きだった…はずなんだ…！」

けれどもう、その感情はどこにもない。代わりに違う人に向けている特別な感情がある。

「…その人のこと、嫌いになったって、ことですか？」

今まで黙って広葉の言葉を聞いていたすみれは、居た堪れなくなり、聞き返した。

すみれの表情を窺えば、自分のことではないのに、自分が傷ついているような沈痛な面持ちをしている。

嫌いになったわけではない。ただ、好きではなかったことを自覚しただけ。

そのことを広葉はすみれに、首を横に振ることで伝えた。

好きではなかったことを自覚した。たったそれだけのことが、どうしてこんなにも悲しいのだろう。

もしかすると、自分はもともと千佳子のことを好きだったわけではなかったのかもしれない。

兄にそれを感づかれるのが嫌で、そしてそんなふうに思ってしまう自分自身も嫌で、ただただ我武者羅になっていただけなのかもしれない。

けれどそれを自覚してしまった今、後戻りすることが出来なくなってしまった。

広葉の二十年の想いは今日、終わったのだ。そしてここから、新しい想いが生まれた。

「ごめんなさい…。そうだ、お詫びに何かさせてください！見たい映画とか、欲しいものとかありませんか？」

それは、ずっと自分の想いを聞いていてくれた、秋元すみれに対しての特別な想い。

黄楊は脳裏にずっと椿姫の姿を思い浮かべながら、ミホのもとに帰った。

そんなに長い時間待たせたわけではないが、ミホはかなり不機嫌な顔をしている。

「どこ行ってたのよ！クリスマスに彼女放っておいて！」

彼女の言い分は充分分かる、というよりも完全に黄楊が悪いのだ。ミホには何の罪もない。

怒って当然だ。急にいなくなった自分が悪いのだから。

メリーゴーランドの前で黄楊は椿姫の姿を見つけ、ミホをこの場所に待たせていた。

懐かしいクリスマスソングが流れる遊園地内は、カップルで賑わっている。

こんな場所では、話せない。

「ごめん。…ミホ、話があるんだ…」

それは、聖なる夜に女の子が聞くには耐えがたい話。けれど今日中に伝えなければならない話。

「な、何よ…」

いつになく真剣な恋人の表情に、ミホは戸惑いを隠せない様子である。

ここで話すのは、あまりに彼女が可哀そう過ぎる。だから。

「お前の家、今日両親はいるか？」

決して変な意味ではなく、いや変な意味だと言ったら確かに、変かもしれない。

クリスマスの夜には、あまりにも残酷な別れ話なのだから…。

二人は聖なる夜に、前世の恋に出会い、一つの感情と、一つの答えを見つけた。

運命

暖房を入れて、暖かくなりつつある部屋の空気は、一瞬にして冷えた。…冷えたように感じた。

原因はただ一つ。黄楊が切り出した別れ話だ。

部屋がやけに寒い。たった今まで恋人だったミホの視線が痛い。

「どう、して…？」

目を大きく見開いたまま棒立ちになっているミホを、黄楊は見ていられなかった。

けれど、もうどうすることもできない。つい一時間ほど前に出会った女性の残像が今でも残っている。

「好きな人が、いるんだ…」

理由は本当にただそれだけ。ミホを嫌いになったわけではない。

こういえば聞こえは悪くないが、もっと言えば、ミホのことはもとから好きでもなんでもなかったということだ。

それはあまりにも自分勝手な、けれど純粋な想いからである。

自宅の空気はミホの家の空気よりも吸いやすかった。ここにミホがいないからということもあるが。

もう日にちを跨ぐ時間まで来ている。

運命を感じた聖なるこの日ではあるが、早くこの日が終わればいいとも思えてくる。

好きではなかったとはいえ、クリスマスに元恋人を自分の勝手な気持ちで、傷つけてしまったという罪悪感は拭い去れない。

しかし黄楊の想いは、それ以上に大きく、膨張していくのである。

黄楊は自室に戻ると、ポケットにしまっておいた小さなメモ書きを取り出した。

“彼女”の大学は自分の通う大学とは少し離れている。電車で三、四十分といったところだろうか。

今現在、冬休み中だと言っていたから、自分よりも休み明けは早いはずだ。となると。

（俺の冬休み中に、会いにいったほうがいいな…）

学部は政経学部。講義の時間もメモ書きに記されていた。

一定の講義しか受講しないのだから、一年生ではなく自分と同学年、あるいは一つ二つ年下か…。

そんなことをぼんやりと考えながら、黄楊は出掛けた格好のまま、ベッドに横たわった。

やけに意識がはっきりとして、頭が冴えている。今日出会った女性の影がいつまでも脳内に浮かぶ。

そういえば広葉は、今日は合コンだと言っていた。

今の時間になっても返って来ないということは、二次会まであったのだろうか。

（広葉、か…）

自分の弟の顔も目蓋の裏に浮かんできた。今まで散々、彼のことを小馬鹿にしてきた。

けれどそれももう潮時だ。というよりも、黄楊が弟をバカにできなくなったのだ。

自分も結局、同じだったのだから。今まで嘘の感情で生活してきた

ことを、黄楊は思い出す。

初めて恋人が出来た日。初めて恋人とデートした日。初めて恋人とキスした日。

けれど、そのどの記憶も、おぼろげなものとしか残っていないことに、気付く。

それは黄楊が、その過去の恋人たちに対して、実は深い愛情など最初から抱いていなかったからだ。

遊んでいたつもりはない。自分はいつでも本気だと、思いこんでいた。

相手は遊びだったかもしれないけれど、自分はいつでも本気で恋をしているのだと、思っていた。

「高谷…椿姫…っ…！」

一途に想い続けて二十年以上、いや五百年以上の月日が流れ、思いがけず出会った女性。

その女性の名前を呼ぶことが、こんなにも尊いことだったということを今、身を持って知る。

黄楊は泣いた。好きな人の名前を呼んだだけなのに、どうしてこんなに涙が出るのだろう。

（ずっと、愛してる…）

それはきっと、昔も今も、前世も現世も変わりなく、黄楊の心にあり続ける想い。

あのクリスマスから約二週間後。二人の兄弟は複雑な想いを抱いたまま、新たな年を迎えた。

黄楊の大学の冬休み明けは、一月の九日までだが、椿姫の大学は五日からだ。

今日は六日。椿姫の大学が始まってすぐ、黄楊は彼女の在学する大学へ向かった。

呆気ない恋人との別れを告げたあの日以来、椿姫とは会っていない。

（俺のこと…憶えてるかな…？）

前世の記憶のことではない。あの数分の出来事を、椿姫は憶えていてくれているだろうか。

校内に入ると、自分が四年間通っているそれとは当然のことながら雰囲気が違う。

少しの違和感と不安を抱え、黄楊は椿姫がいるはずの校内を歩く。

大学は高校と違い、広いし在校生の数も倍はいる。
この中で一人の女性を見つけるのは結構、大変なものである。
平然と歩いているように周囲には見せ掛けていても、黄楊の視線は左右へと目を光らせていた。
約七十億人がいるこの世界で、思いがけず出会えたのだ。今回もきっと…。
「ああ！この間の変な人だ…！」
もう一度、再会できることだけを考えて神経を周囲に張り巡らせていると、後ろから声がした。
その声は確実に黄楊へ向けられたものである。
瞬時にその声の主が、今探していた人物のものであることを知り、黄楊は反射的に振り返った。
「た、かやさん…」
「この間はどうも。でも、本当に来たのは、ちょっと驚きかも…」
ヘタをすればストーカーだと思われてしまう黄楊の行動に、椿姫は動じた態度は示さず、くすりと笑ってからかい交じりの言葉を掛けてきた。
一方で黄楊は、初めて出会った時と同じく、ただ茫然と椿姫を見つめていた。

それに気付いた椿姫は、さすがに少し困惑して苦笑する。

「あの…私、あなたとお知り合いでしたっけ…？」

新年最初の部活動は、もちろん冬に行った上映会のレポート提出だった。

暖房を付けた暖かい部室で、部員たちは罰ゲームへの恐怖のためか、苦笑いを浮かべている人が多い。

「大丈夫だよ、秋元さん」

すみれのレポートは、広葉がフォローすることによって完成したと言っても過言ではなかった。

広葉にすみれがレポートについて相談を持ちかけたことで、冬休み中、二人は会うことが多かった。

原稿用紙を部長に渡す時、かなり緊張していたすみれに、広葉は肩を軽くたたいて励ましたのだ。

結局、あの合コン以来、大野千佳子の生まれ変わりである橋場柚とは一切、連絡をしていない。

勘の良い兄に、自分でもそわそわとした態度を取っていたことで気付かれることを恐れていたが、兄の方にも色々あったらしく、前世についての会話は休み中、せずに終わった。

兄があんなにも深刻そうな顔をする日々を、今まで広葉は見たことがない。

（兄さん…今の恋人と何かあったのかな…？）

思い当たることと言えばそれくらいだ。

進路に関しては、全く悩んでいた様子もないし、自分のように前世のことを思っていたわけでもない。

しかし、今は兄の事より何より、自分にけじめを付けなければならない。

この冬休み期間、広葉は自分なりに悩み、ある一つの結論に至った。

もう一度、橋場柚と会いそれでもまた、何の感情も湧かなかったら、その時は…。

だから今日、橋場柚が通う大学のサークルに足を伸ばすことにした。

「はい、じゃあ今日はレポートの提出だけで終わり。撤収！」

今日は冬休み明けで、レポートの提出だけで研究会は終わりとなった。

柚の大学も今日が休み明けとなると聞いていたので、広葉はこの足で彼女のいる大学へ向かおうとしている。

「永瀬先輩」

支度を整え、広葉が部室から出ようとした瞬間、すみれはそれを呼びとめた。

「はい…？」

出来れば、すみれには何も言わず柚に会いに行きたい。理由は誤解されるかも知れなからだ。

柚に自身が、気があるのではないかと。すみれにだけは、誤解されたくない。

（…どうして、そう思ってしまうんだろう…）

その答えをもう、広葉はとっくに得ているはずだ。けれど、認めたくない。けれど…。

「この間、行った喫茶店。今日も一緒に行きませんか…？も、もちろん、都合が良ければですけど…」

ほのかに頬を赤く染めているように見えるのは、気のせい…？

広葉はもう、自分の気持ちを知っている。確かめにいく必要など、ないほどに…。

「は、はい！…一緒に行きましょう」

ああ、もう本当に”千佳子”への想いは、消えてしまったんだ。
前世の思い出が、今では他人のことのように思えてしまう。
その代わり、現世で見つけた新しい想いを、育もう。
広葉は切に、そう誓った。

朝早くから椿姫の大学に訪れていた黄楊は、彼女と昼食を取る約束をした。
そして今まさに、椿姫の在学する食堂で、二人は会話する。だが、それは会話とも受けがたいものだ。
「私は帰宅部なんです」
「そう、なんだ…」
「帰りは、親しい友人と食事したり、カラオケにいったりするんですよ」
「…そう、なんだ」

「さっきからそればっか…」

「そう……い、いや、そんなことは…」

ここで初めて、椿姫がつまらなそうな声で言うと、黄楊は慌てて違う返答をした。

彼女の話を聞いていなかったと言えば、嘘になるが、もっと言えば”聞こえていなかった”と言ったほうが最もである。

聞こえていた内容と言えば、彼女は大学二年生の文学部であることくらいだ。

しばらくの間、二人に沈黙が流れた。

椿姫は黄楊をじっと見つめ、黄楊はその真っ直ぐな瞳に戸惑い時々、目を逸らしてしまう。

「あの…」

椿姫の真剣な眼差しは、声色にもそれを滲ませた。

「私、永瀬さんと、以前何処かでお会いしましたっけ？あ、クリスマスの日以外で」

それは当然、椿姫が気にすることの一つであるが、彼女にはもう一つ、目の前の男に対して思うことあった。

なぜクリスマスの日、突然肩を掴まれたことに、最初は驚愕したものの、結局自分の在学する大学の場所を教えたのかという疑問だ。

椿姫は正直あの瞬間、なぜ自分があんな行動を取ったのか理解できなかった。

（あえて言うなら、興味本位なんだけど…）

本当に自分のいる大学へ訪れてくれれば面白いし、そうでなければそれまで。

だが結果は、”面白い”ものとなって、椿姫のもとへやってきた。

それに、自分を見つめる黄楊の眼差しに、ただならぬものを感じたのも事実。

それは下心のある厭らしい視線でも、女を口説こうとする熱っぽい視線でもなかった。

何かもっと深く、彼の揺れ動く感情が伝わってくるような…。

そして黄楊はというと、彼女の言葉に何て返そうか迷っていた。

「…会ったことは…」

どうする。何て言えばいいのだろう。前世での恋のことを、彼女に話すか。

いや、それではただでさえ彼女に与えた第一印象が”変な人”だというのに、それが更に悪化する。

“ただの人違いです”と惚けることはできない。失った恋人に似て

いるから、と嘘は付けない。

ならば…。

「君のことが、好きなんだ…生まれる前から、ずっと…」

これで終わる恋ならば、それでいい。それでも、これかもずっと、俺は君を想い続ける。

寒空

二人は、前世の記憶を持って生まれてきた。その内に、特別な想いを抱いて。

では、生まれ変わった二人は、前世の想いを貫き通すべきだったのか。

それとも、全てを新しい想いに切り替えるべきなのか。その答えを知るのは…。

思いもよらない告白を受けた椿姫は、驚くというよりもむしろ唖然としてしまった。

言われたことを理解するのに数秒間の時間を要し、その次には黄楊の言葉を素直に受け止められなくなる。

生まれる前からずっと好き。彼は今、自分にそう言って告白してきた。

新手の嫌がらせか、それともナンパなのか、それとも会話を面白く

させるための冗談なのか。

それとも、本気だとでも言うのなら一目惚れ。そう考えるのが一番、しっくりくるかもしれない。

けれど”生まれる前から”という言葉については、いくら考えても解らない。

たとえるならばそれくらい好きだ、ということだろうか。

（でも、一目惚れで…そこまで？）

そう考えると嬉しいというよりも、むしろ逆に引いてしまう。

しかし唖然とする自身を見つめる黄楊に、初めて会った日と同じ感覚を彼の視線に覚えた。

あの時と同じ、深く、込み上げ、湧きあがっている感情が瞳から窺える。

椿姫の困惑に気付いているのか、いないのかは解らないが、黄楊は続けた。

「今言ったことは、本当。君のことが好きだ。でも、これは決して付き合って欲しいとか、そういう意味じゃなくて、ただ単に俺が、伝えたかったから…」

「……」

こんなにも真剣に、ストレートに女性へ告白した事なんて、今まで

なかった。

“好きだ”。そう言ったのも、目の前にいる女性が初めて。最初で最後のことになる。

恋人だっているかもしれない彼女に、今さら付き合ってくれとは言えないし、何より可笑しい話だろう。

今日が会って二回目。しかもほんの一時間程度。

でも、それでも伝えずにはいられなかった。いくらタイミングが悪くても、急なことであっても。

椿姫は黄楊にそう言われると、何か考え出したのだろう。視線を下に向け、頭を抱えている。

「…えーっと…それは、つまり…私と付き合いをしたいわけではないけれど、一応私が好きだと…？」

おそらく、自身のわけの解らない告白を、彼女なりに解釈した結果なのだろう。

そう解釈するなら、そう思ってくれても構わない。好きだという気持ちを解ってくれればそれで。

「そういうことで、いいよ…」

これで広葉のことを、完全にバカにできなくなったな。黄楊はそう思った。

そういえば、冬休みに入った頃からだと思うが、広葉の雰囲気がどこか変わった気がする。

何処が？と具体的に問われれば返答に困るが、それは悪い意味ではない。

信念を固く持っていた目に、揺らぎのようなものを感じるようになった。

その”信念”というのは、前世の記憶が彼に与えたものに違いない。

（……――まさか…っ…！）

以前、広葉が同じサークルに入っている後輩の話をしていたのを、なぜか思い出した。

その時は、女性の話をする広葉が珍しく”もしかすると”と思っていたが。

（広葉は、前世の想いを…解放した…？）

そう考えると、今まで広葉が自身に言ってきた言葉の数々を、今度は自分が広葉に言ってやりたくなった。

（広葉はいつも、俺をこんなふうに思っていたのか…）

前世の恋を鵜呑みにするなんて…、という今までは広葉が抱いていた気持ち。

それを、身を持って思い知らされた。けれど…。

（それを決めるのは結局、俺たち兄弟だ…）

前世の恋を貫き通すのか、それとも新しい想いを育んでいくのかは、黄楊と広葉次第。

決めていいのは、自分自身なのだ。答えは自分でしか生み出せない。

やっと一つの結論に辿り着いた黄楊。その直後のことである。

黄楊と同じく、何かを考えていた椿姫が食堂で注文したコーヒーを飲み干したのと同時に。

「そう言われると、付き合っちゃいたくなるんですけど！」

「…え？」

この時、椿姫も短い時間で色々と考えていた。

こんなふうに自分を想ってくれる人は、今まで付き合ってきた男性の中でもいない。

出会ったあの日も、今も変わらない、深い”何か”を感じ取れる男性は、おそらく二度と現れないような気もする。

けれど彼は、自分とは付き合わなくてもいいと言う。

矛盾だらけで、ツッコミどころも満載である告白だけれど。

まだ、彼のことをほとんど何も知らないけれど。

「永瀬さん。責任とって下さいね？」

自分でも、こんなふうに人を想うのは初めてのことかもしれない。

でも、彼のことをもっと知りたいと思った。そしてこの人とならきっと、上手くいく気がする。

私の発言に、今度は永瀬さんが困惑しているようだ。目を見開いて私を見つめてくる。

（その瞳、好きになりそう…）

それは、冬の寒空の下で起こった、奇跡の始まり。

広葉とすみれは、二人で研究会が終わった帰り、喫茶店に寄った。

香りが程良い紅茶が評判の、男性にも女性にも人気のあるチェーン店である。

千佳子への想いに終止符を打ち、すみれへの想いを自覚した広葉。

窓際の客席に二人で向かい合って座りながら、好きな人と他愛のない話をする。

だが、改めて自覚して、彼女へ想いを伝えようとすると、恋愛経験のない広葉は内心で頭を抱えた。

告白はどういったタイミングでするべきなのか。アプローチはどんなふうにすればいいのか。

さっぱり分からない。

兄に聞けばきっと何か、得るものはあるのだろうが、もしかするとそれは、相手に”軽い人だ”とか思われるような内容かもしれない。

だとすれば、自分で方法を見つけるよりほかはない。

だが、改めて自分の気持ちを自覚してしまうと、今まで普通に話せていたのに、どこかぎこちなくなってしまっている。

本当に微妙なところではあるが。そのことに広葉自身も気付いていた。

「永瀬先輩は、レモンティーが好きなんですか？」

「はい。秋元さんはローズティーを頼んだんだよね？僕も次に来たときはそれを頂いてみようかな…」

すみれには、ぎこちなくなっていることは気付かれていないかもしれない。

ならばこの調子で、これからも彼女に接していこう。

告白なら、焦ることはない。

だからといって、ずっと言わないでいると、すみれは綺麗な人だから、彼氏の一人くらい、できてしまうかもしれない。

（それは困る…早めに言ったほうが…いや、でも彼女にその気がなかったら…）

鈍感なことに、広葉はすみれから誘いを受けているというのに、彼女の気持ちには気付いていない。

それだけ恋愛経験がなかったのだから、それは仕方ないことだ。

「あの、これからも時々、こうして寄り道していかない？」

焦りからか、広葉は勢いでこんなことを口走ってしまった。

我ながら恥ずかしくて、背中から身体全体が熱くなり、冷汗がダラダラと出てくる。

（何てこと、言ってしまったんだ…）

これでもし、断られたらどうしよう。そんな不安もつかの間だった。

すみれは少し黙った後、広葉の言葉に喜びの色を見せた。

「は、はい！もちろんですっ…！喜んでお供します！」

「本当！？…よかった…」

すみれの了解を確認し頷かれた後、広葉はホッと溜め息を吐いた。

（もう、兄さんに反抗できなくなったな…）

今まで、兄が前世の記憶を無にするような発言を、自分へ向けてきていてそれにいつも反論していたことを思い出す。

だが、今になって思い返してみれば、兄は自分に言い聞かせてくれていたのかもしれない。

過去は過去、今は今。

一つの想いを貫き通すことも素晴らしいことだけれど、新たな想いを育むこともまた、大切なことだということを。

前世で約束した千佳子は、もうすでに橋場柚という新たな人生を歩んでいる。

その胸の中に傷を付けることなく。ならば、自分もいいだろう。

クリスマスの夜に、本当の意味で生まれ変わった。比島大助から、永瀬広葉という人生に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3509y/

Winter Waver

2012年1月11日01時48分発行